

「人にやる気・村に活気・地域づくり学習会」 part 6

集落自治から見えてくるもの

ー農村と都市との交流ー

【場 所】2008年8月19日(火) 13:00～16:00 松本大学5号館512教室

白戸：時間になりましたので、ただ今から松本大学オープン・カレッジ「人にやる気・村に活気・地域づくり学習会」の第6回になりますが始めさせていただきます。本日は暑いなか、またお忙しいなか、本学の学習会に参加いただきどうもありがとうございました。私は本日の司会・進行をつとめさせていただきます、この松本大学の地域総合研究センターの研究員の白戸と申します。よろしくお願いいたします。

本日はこの学習会の1回目ということで講師の方に来ていただいています。今日のテーマである「集落自治から見えてくるものー農村と都市との交流ー」ということでお話をいただくかたちになっています。この学習会はこれとセットで、10月25日、26日の1泊2日ですが、実際に学習会で話しいただいた地域に行ってみるというようなことも予定しています。

本日は飯田市の方からお二人の方に講師をお願いをしています。その方々のご紹介等は後ほどいたしたいと思いますが、最初に学習会に先立ちまして、本学の学長代行住吉の方からご挨拶をさせていただきますと思います。



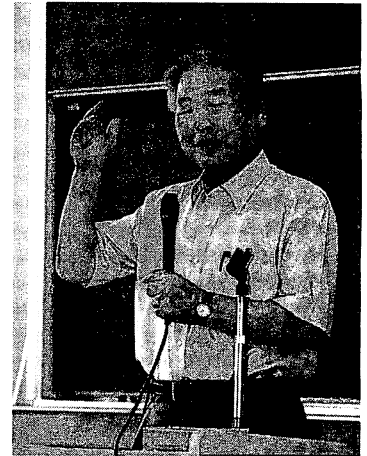
住吉：皆さんこんにちは。今日はようこそお越しくださいました。「人にやる気・村に活気・地域づくり学習会」も6回目となります。松本大学はできて7年目に入っていますが、この間地域との連携を深めながら、入学してきた学生をその連携のもとに育てていくという、そういうやり方がけっこう全国でも知られるようになってきました。色々な自治体からもこの大学がどんなやり方をしているのかということで、見学にくるくらいまでに名前が知られてきたのかなと、ようやく7年目にしてそういう状況になってきたのかなと思っています。

そこで、今日の話ですが、食糧自給率の問題があります。安全で安心な食品ということで、農村のことも考えるなど、われわれには盛りだくさんの課題があると思います。そのなかで私自身も考えるんですが、じゃあ日本のなかで自分たちも農業生産をしていく、畜産をやっていくというような話になったときに、誰がそれを支えるのかということです。やはり村で農業をやっていく人口がどんどん減って、後継者がいなくなる、そういうなかでどうしたら自給率を上げていって、日本の農業を活性化できるのかという視点で見たときに、町とか村とか、そのもの自体が活性化していかないと、なかなかそういう基盤づくりにはならないだろうなと思います。今日来ていただいた長谷部さん宮内さんのお話を聞かせていただいたら、どういう町づくり村づくりを重ねていって、そのなかで今言ったような食糧の問題だとか、安全で安心な食品の問題だとかがどうなっているかについて、たぶんヒントが得られるんじゃないかと思って楽しみにしています。

白戸：それではさっそく学習会の方に入らせていただきたいと思います。はじめに今日の講師の方々をご紹介させていただきます。まず、飯田市の上久堅からいらしていただきました長谷部三弘さんです。もう一人の方は、同じく下久堅からいらしていただきました宮内博司さんです。

それでは今日の学習会について、本学の地域総合研究センターの研究員であります玉井袈裯男の方よりご案内させていただきます。

玉井：皆さんこんにちは。地域総合研究センターの研究員ということになっていますが、何を研究しているかという、全部まとめて申し上げることができないようないい加減なことをやっていますが、私自身は、昭和20年代から地域の学習運動に顔を突っ込んでずっとやってきたんです。まあ一途にやってきたという格好いいんですが、ほかに行くところがなかったんです。それでももう60年くらいになるわけですから、ずいぶん長いことあります。当時は長野県に120何か村ありましたが、やはり学習の風というものが熱くある所と、それほどでない所があります。そのなかでも飯田市というところは、青年団の活動でも、あるいは公民館の活動でも、非常に活発なところでもあります。私も若いときからいろいろなことを学ばせていただきました。



今ここにいらっしゃる長谷部さんは、そのころ公民館の主事をやっていらっしやいて、私がなんでも34、5歳のときに飯田に行ってずいぶん勇ましい演説をやったらしいです。生意気ざかりですから、その当時は。共産党もひっくり返ってしまうような話をしたのではないかと思いますのですが、そのとき公民館の主事をやっていらっしゃった長谷部さんが、ソニーか何かの大きなテープレコーダーを回しておられて、私が34、5歳のときに話した話が長谷部さんに握られているわけです。どんな話をしたか、まだよく聞いていませんが。それ以来の長いお付き合いです。

長谷部さんは飯田市の上久堅に住んでおられて、ずっと長い間飯田市の公民館主事をやっていらっしゃり、しまいには公民館長もやられて、故郷に帰っていかれました。帰っていくといっても、そこから通っていたんですが、これは上久堅の柏原というところですよ。そんな長いお付き合いですが、飯田というところは当時から全国的にみて学習の風が、社会教育の学習の盛んなところですよ。その中にある一番中心的な役割を果たしてこられたのが長谷部さんであります。

今から何年前かに公民館長を辞められて、自分の家のある上久堅の柏原というところに根を生やして、村づくりといいますか、集落づくりを熱心にやってこられた方です。特に上久堅に「ひさかた風土舎」というものをつくりまして、「風土舎通信」を毎月毎月、もう何号になりますか、200何号になるのでしょうか、毎月毎月出して、ひと月の活動の集約として今日まできていらっしゃるということです。

宮内さんは、そのすぐ下の下久堅というところで、これはまた自治会とは付かず離れずなんです。私は宮内さんがずっと自治会長（区長）をやっていたらそうではないんですね。自治会長は別にいるわけです。よそからみれば宮内さんは自治会長ではないかとみえるんですが。ところがだいたい狭い集落ですから、公の自治会長と活発になんかをやる人がいると、なかなかうまくいかないものですが、ここは非常に良くいっているんです。自治会長さんが、宮内さんの活動を大事に大事に認めて、それがちゃんと両立していて、少しの軋轢もないという極めて珍しいところでもあります。

そこで今日は、そのお二人に来ていただきまして村づくり、両方とも農生産の村づくり、集落づくりという考え方が良いと思いますが、それをやってこられてこれほどのところは、私が見たところでは長野県下はもちろん、日本のほかのところでもあまり見たことがないというようなすばらしい活動をしていらっしゃる。その方のお話をたっぷりお聞かせいただきたいと思います。それではよろしく願います。